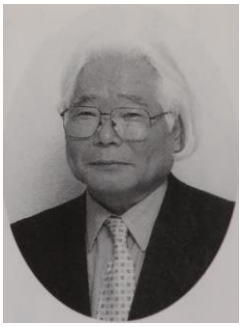
「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代 (※1) の『思い出の記』（その１）」

《　相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等　》

困窮、混迷、大改革の六年間・ 進学は最高の中 47 回・高１回卒 (※2)

高１回卒　渡 部　　行 (※3)



相馬中学１年生から３年生の１学期までは、太平洋戦争下にあっての軍国教育。昭和 20 年８月 15 日の敗戦による虚脱感と戦後教育への転換。23 年３月、相馬中学最後の 47 回卒業生。そして学制改革により同年４月から相馬高校が発足して３年生に編入。翌 24 年３月、高校第１回卒業生として巣立った。

６年間という長い在学期間中は、戦中、戦後の大混乱、窮乏生活そして政治、経済、社会、国民意識の変革という混迷のなか、学制の大変革の荒波にほんろうされた。相中、相高 110 年の歴史の中では勿論、おそらく今後もこのようなことはないだろう。

相馬中学の１年生に入学すると同時に軍事教練があり、厳しく鍛えられた。陸軍第二師団（仙台）から現役の少尉か中尉が配属将校として派遣され、教練を担当した。配属将校は現役だけに２～３年で交代するが、学校行事などの席次は校長の次で地位は高かった。

全校生約 1000 人の教練を配属将校一人では出来ない。そこで退役将校と下士官も教練を教え、また軍人勅諭も暗唱させられた。教練と体育がもっとも厳しく、少しでもたるんでいるとビンタが張られた。

だが、制裁は一般の授業でもあった。何か不祥事が発生すると、クラス全員の連帯責任として、級友が向い合っていわゆる対向ビンタをやらされた。お互いに手加減は許されず、とても痛かったことを思い出す。当時は上級生による下級生への制裁だけでなく、同級生間での暴力やイジメは日常茶飯事で、今ではとても考えられないだろう。

敗戦が間近い昭和 20 年４月、３年生に進級した。同月 20 日から６月５日まで、県内石川郡沢田村に建設する陸軍飛行場造成に動員された。わずか 14 歳の少年達への過酷な重労働。衣食住なかでも育ち盛りの子供達にとっての飢え、それはこの世の生き地獄ともいえるものだった。このことは母校の 80 周年、100 年史にも書いてあるので、取り上げない。しかし私達はこれまで「石川の学徒動員の時の苛酷さを思えば、どんなことにでも耐えて生きられる」というのが合言葉であった。

石川から帰校しても、授業はほとんどなかった。アメリカ軍の本土上陸に備えて太平洋岸に陣地を築いた。私達の飯豊郷友区の下級生は磯部の海岸、見晴らしのいい丘に重機関銃の銃座と、そのまわりにタコツボといわれる小銃座をいくつか掘らされた。上級生は京浜や県の軍需工場に動員されていた。

この当時、軍の武器が消耗し、学校にあった教練用の三八式歩兵銃は全部、軍隊に徴発された。残っていたのは明治時代の村田銃と、銃身の短い騎兵銃だけだった。そのかわり生徒は家で竹槍を造って持ってくるよう指示された。この時、配属将校が「穂先は火であぶり、そこに油あるいは牛糞を塗ると固くなる」といったのを覚えている。これでは戦争に勝てるわけがないのだが、軍国愛国少年達は、日本の勝利を信じて疑わなかった。

開びゃく以来の敗戦は、日本国、国民にとって大ショックで、極度の虚脱状態におちいった。GHQ（連合国軍総司令部）の命令で、日本の過去は否定された。教科書も数学や科学など不変のものはともかく、歴史や国語などで占領政策に不都合な箇所は墨で塗り潰させられた。新しい教科書はとても間に合うはずがない。同時に道徳教育や剣道、柔道も禁止されたのである。

５年生で中学最後の47回（48回卒は４年修了）卒になった。23年４月から前述のように、相馬高校が発足した。47回卒のうち大学に進学できなかった者、もっと以前に卒業していた社会人、あるいは軍隊に入隊していた人も含めた希望者が新制高校３年生に編入された。３年生は約100人だが、社会人や軍人だった人もかなり多かった。その人達は酒もタバコも経験しているので、高校生として今さら禁止されても実行できない。

想い出すと今でも背スジが寒くなる。木造校舎の中は高下駄、つまり土足で歩く。卒業が間近い３学期の冬は寒いので、机を全部、太陽の差し込む南側に寄せて授業を受けた。掃除は教室の床板をはがして、ゴミを床下に落とす。暖房用ストーブで焚く石炭の配給はわずかですぐになくなる。そこで机やイスをこわして燃料にした。卒業試験のときには、もう机がなくなり、仕方なしに卓球台を運んできて、その上で受験した。

先生方も「あいつらが卒業するまで待とう。２回卒から厳しくする」と、サジを投げられていたことを後で聞かされた。

６年間もの長期間、しかも大混乱の時代で母校にも大変な迷惑をかけたという自責の念にかられる。それだけに私達は母校や同級生に対する思いが深い。母校への寄付も何度かしてきたが、多分に罪滅ぼしの感が強い。

激動と困窮の時代だったからこそ、皆んな根性があった。大学進学実績では、相中第１回卒についで最高水準、この記録が破られることはないだろう。

相中第１回卒業生（明治36年３月）は56人。このうち東大６人、陸軍士官学校５人、東京商大（現一ツ橋大）４人、仙台医専（現東北大医）４人、早大３人、東京外語大２人など、まさに圧巻である。この原因は、相双地区で初めての中学開校だけに、広い地域からまた積み残しの３～４年分の生徒が入学したこと。さらに中退も多く、精鋭だけが卒業したためと聞かされた。

この当時、大学への進学は旧制の高等学校を経ているが、難関の東大に合格しただけではない。医学部の折笠晴秀[※4]氏（馬城会長）をはじめ法学部卒の先輩も銀時計組、つまり首席で卒業したという。なんと誇らしいことだろう。

わが同級生は、中学47回卒130人、そして高校１回卒98人、合計228人である。これの進学は、東北大27、早稲田７、慶應４、明治11、中央３、日本９、東大大学院１、法政４、福島12、東北学院大10などだ。これは主な大学と人数の多いところで、このほか多くの大学に進学している。苦労して夜間部を卒業した人もいる。

これは進学した人達で、合格した数ではない。優秀な卒業生がかけ持ちで、特に難関の私立大にいくつも合格し、それが全体の合格数にカウントされているのとは異なる。

もっとも内幕を正直に書く必要がある。私達の同級生の中には、戦況の悪化に伴い東京を中心に大都会からのいわゆる疎開組の転校生が多かった。入学したときは、４クラスで200人だった。しかし家庭の事情で中退する者、学業についていけず落第（留年）する者、さらに不良行為で退学になった者などで、ざっと50人が脱落した。この脱落した50人を、疎開組を中心とする転校生が埋めた。

進学がきわめてよかった理由の第一は、よく勉強し成績もよかった疎開組がいたことだ。次に受験の機会が３回もあった。最初に中学４年修了で旧制高校や大学予科を受験できた。四修でなんと難関の旧制第二高校（仙台）に５人も合格した。この中には心臓外科の権威で、全国自治体病院協議会会長の小山田恵 (※5) 君もいる。中学卒のときは、もちろん大学を受験できる。さらに高校卒と現役で３回も受験のチャンスがあった。卒業後の浪人受験は当然である。

もう一つ、学制改革により、例えば旧制高校や高等専門学校に進学していた人も、大学卒になった。例えば仙台の高等工業専門学校が東北大に合併され工学部になったからである。東北大卒 27 人という驚異的数字には、こうした背景もある。

いずれにしても、私達の同級生は頑張ったのである。それを誇りに思い、また後輩諸君の健闘を祈りたい。

（※１）中 47 回 昭和 23 年卒、中 48 回及び高１回　昭和 24（1949）年卒及び
高２回 昭和 25（1950）卒～高４回 昭和 27 年（1952）卒の方々など。
馬城かわら版「思い出の記」に転載済みの方々もそうである。
「102 号」 渡部　行　高１回卒 “ ああ紅の血は燃ゆる ”
「103 号」 菊地邦雄 高２回卒 “ 想い出の六年間 ”
「110 号」 河西貞夫 中 47 回卒 “ 相中での五年間をふりかえって ”
「111 号」 渡辺　旻 中 48 回卒 “ アメリカ映画の魅力 ”
「112 号」大井博之　高１回卒 ” 当時の戦況と学徒動員 ”

（※２）創立 110 周年記念誌「紅の旗」より。
中 47 回　昭和 23（1948）年卒。　高１回　昭和 24（1949）年卒、６年間在学。
中 47 回卒、高１回卒とも入学は同じ昭和 18 年。

（※３）昭和 24（1949）年卒　飯豊出身。

（※４）相馬中学校第１回生　明治 36（1903）年卒　福浦出身、初代馬城会長。

（※５）馬城会名簿では 中 47 回　昭和 23（1948）年卒　鹿島出身。
馬城かわら版 第 114 号に「思い出の記」 “ 終戦のあとさき　60 年消えぬ記憶 ”

（転記など　村山）